

## 「国民」の測りかた

トルコ共和国における近代人口センサス導入をめぐる

穂山祐子

### 一 はじめに

西欧で生み出された統治の技術である近代人口センサスは、近代国民国家の成立と並行して出現し世界中に広まった。人口センサスは、国家にとって社会を掌握し、管理するために不可欠であり、とりわけ近代以降は「国民」形成と密接に結び付いた事業であった。トルコ共和国において、近代人口センサスは一九二七年に開始され、一九三五年からは五年毎に実施されるようになる。一九二三年の共和国建国に際しては、度重なる戦争とそれに伴う国境線の変化、移民、強制移住、住民交換とい

った出来事が生じ、これらにより民族、宗教、言語の問題が複雑に絡み合う大規模な人口変動が引き起こされた。それゆえ、国力を意味する人口の数的把握のみならず、「国民」となった人々の質的把握と、その地理的分布を把握するための公的な調査は重大な意味を持った。おりしも均質的な「国民」の創出が求められていた新生トルコにとって、人口センサスとはさまざまな属性の人々から標準的鑄型を抽出する作業であったともいえる。しかし、オスマン帝国の遺産を引き継ぎつつ、新たに「国民国家」となることを目指したがゆえに、そこでの「国民」の描かれ方は複雑にならざるを得なかった。本稿では、国民国

家トルコの近代化、西欧化、世俗化が急速に進められたアタテュルク統治期に行われた一九二七年と一九三五年の二回の調査を中心に、共和国センサスの基礎がどのように形成されていたのかを「国民」を測る指標の観点から考察する。オスマン期およびトルコのセンサスに関する先行研究は、基礎資料としてのデータの整備や、人口学的な関心に基づいた調査データの精度、信頼性、整合性の問題を扱ったものが多い。そうした議論を踏まえて、ここでは集団分類の焦点となる指標の定義、データの収集にあたって調査員に出された指示、結果の加工と表示方法に注目することとする。

## 二 近代人口センサスの普及と指標の問題

センサス（国勢調査）とは、出生、死亡等の情報に基づいてフローとしての人口指標を収集する「動態統計」(Vital statistics) に対し、特定領域内の一時点におけるストックとしての「静態人口」をはかり、同時に国民の基本的な属性を補捉する調査を意味する<sup>①</sup>。徴募、徴税のために洋の東西を問わず行われてきたセンサスは、近代においてその形を大きく変えていく。何を近代センサスの要件とするかは研究者によって異なるが、たとえば Scott は①国家あるいはある領域内の全人口をカウ

トすること、②調査および記録の単位が個人であること、③調査が決められた時間内で行われること、④データの刊行が前提とされること、⑤徴税や徴募とは区別されていることの五つを挙げている<sup>②</sup>。歴史的にこうした条件をすべて備えたセンサスが明確なかたちで出現したわけではないため、どの時点が始まりとするかについての見解はさまざまであるが、近代的な性質を持ったセンサスは十八世紀ごろ出現し、十九世紀には西欧の国家システムの中に定着していったといえる<sup>③</sup>。

人口センサスと近代国家に関わる諸問題は、多くの研究者によって多様な側面から取り上げられてきた。センサスの普及は、フーコーが指摘した人口学的な関心に基づき出生率や死亡率、公衆衛生といった身体にまつわる問題を国家管理のもとに置くこととする、いわゆる「生—政治」への志向の発露ともとらえることができるし<sup>④</sup>、また、トビーが主張する国家が国民と非—国民を区別し、身元確認の技術と移動の規制によって行なう国民の「掌握」とも関係しているといえる<sup>⑤</sup>。同時にきわめて重要な背景となったのは、Scott が言うように、国家にとってセンサスが社会を読み取り可能なものとするための一形態であったことである<sup>⑥</sup>。センサスは明確な形を持たない集団を整理して、数値で読み取れるものにしたという点において、近代国民国家のシステムの中で決定的な意味を持った。これはアンダーソン

が人口調査を「数量化によって一つの数と理解された一人の人間を、国家のつくりあげた格子地図の中に位置づけるシステム」として捉えた視線にも同様に共有されている<sup>7)</sup>。

しかし、センサスの中で明確な境界が存在しない人々をどのような指標によって測り、計量化できるものとして捕捉するかは、調査が実施される時代や地域によって異なる。年齢、性別、婚姻状況など、ほとんどのセンサスで聞かれる質問とは対照的に、人々のアイデンティティを測る指標となる民族、人種、国籍、宗教、言語といった項目の使用に差が出るのは、これらが統計作成主体の政治的な姿勢が色濃く反映する指標であるからである。指標の違いにかかわる問題は、センサスが西欧世界に急速に広まった一九世紀にはすでに取り上げられていた。一八五三年、国家統計調査の最新技術を各国間で共有しようという意図のもと、ブリュッセルで第一回国際統計会議が開催されたが、ここで浮き彫りになったのが、国家のかたちの違いに起因する国民の把握方法についての物差しの違いであった。早々に「国民国家」化を成し遂げたフランスに代表される、いわゆるフランスモデル（西側モデル）を取る国々は、国民と非国民の間に明確な線引きをした。他方、政治的な領域とナショナルなまとまりが一致しないドイツモデル（東側モデル）をとる多民族国家陣営（帝政ドイツ、オーストリアリハンガリー帝国、

帝政ロシア）では、文化に基づく集団分類に重きが置かれた<sup>8)</sup>。一次大戦前、人々の文化に基づく帰属意識を最もよく表す概念は何かということについてこれら多民族国家陣営により得られた共通見解は、回答者の混乱を招くことのない言語を最も客観的な指標として問うことであった<sup>9)</sup>。では、国境内に宗教、言語、エスニックの点で多様な属性を持つ人々を抱えながら、理念的には西側の国民国家モデルを採用して出発したトルコ共和国において、国民を捕捉する指標はどのように設定されたのだろうか。

### 三 オスマン期における集団把握指標

まず、トルコ共和国センサスについて考える前提として、オスマン期の状況を概観しておくことにしたい。オスマン期の統計システムは、課税のための検地および人头税把握のための非ムスリム調査を基礎として開始された。こうした背景から、オスマン期の統計において人々を分類する指標は必然的に宗教に置かれた。近代化改革を背景とし、はじめて個人の把握という性質を有した一八三二年の男性人口に対する静態調査で<sup>10)</sup>、人々は大きくムスリムと非ムスリム、あるいはムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒に分けて記録されている<sup>11)</sup>。人口調査制

度の大きな変革点である一八八一年の人口登録法 (Sicilianus nizammans) の発布に基づき、徴税・徴募と切り離されて行われた一八八一―一九三年調査では、キリスト教徒集団を中心に分類は細分化し、ギリシャ正教徒、アルメニア正教徒、ブルガリア正教徒、カトリックやプロテスタントといったラベルが生じてくる<sup>12)</sup>。一九世紀半ばからの民族主義の高まりを受け、国内のキリスト教徒は民族的、言語的な紐帯を意識し始め、学校や教会の分離が進行していた。集団分類細分化の背景には、キリスト教徒内の分裂、衝突があったわけである。帝国期最後に行われた一九〇三年調査においても、分類ラベルの細分化はさらに進んでいく<sup>13)</sup>。

しかしこの一方で、ムスリムは一貫して単一集団として示され続けている。この背後には、マジョリティ集団であるムスリムの人口数を最大限に確保し、それ以上の分割を行わないという意思があったと考えられる。露土戦争後のベルリン会議（一八七八年）以降、民族独立を担保するための人口内の民族構成割合を示すために使われたのは、各民族集団によって作成された人口統計であった。人口統計データは、領土的正統性を主張するための最も強力な根拠となっていたのである。基本的な集団分類原理があくまで宗教に基づいていたことは、一九二三年にギリシャとトルコの間で合意された住民交換において、交換

対象者が使用言語と関わりなく、宗教によって決定されたことにも見て取れる。

#### 四 統計局の設立とセンサス実施

共和国建国から三年が経過した一九二六年、ムスタファ・ケマル（アタテュルク）の命によって総理府付属の中央統計局が組織された<sup>14)</sup>。統計先進国ベルギーから招聘した統計専門家の局長のもと、翻訳部門、文書検査部門、統計部門、製図部門からなる組織として発足した統計局の最初の大規模事業が人口センサスの実施であった。一九二六年八月二日に人口センサス法（法八九三号）が成立し、翌年に人口センサスが行われることが決定される。センサス実施前に首相のイスマット（イノニユ）の名前で出された「人口センサスに関するトルコ人民への布告」は、調査実施に向けた準備が入念に行われたことへの言及から始まり、以下のように続いている。

（……）慎重かつ周到な準備のすべては、センサスが国家にとってどれだけ重要であり欠くべからざるものであるかを示している。人口数を正しく知ることは、すべての組織活動の核と基礎を作り上げる。センサスはこの国の物質的、精神的

な向上と進歩のために、人口密度と質に鑑みた適切な解決法を選ぶにあたって、国家にとって最も価値ある案内書となる。

(……) われら民族が勇敢さと犠牲精神で作りに上げたこの国には、いったい何人の住民がいるのだろうか。現在、そして未来の我が国の安全を支える力と豊かさはなんだろうか。我が国の国境が同胞の血と人民の祖国愛あふれる骨で作りに上げられたその日から、疑いなく、全トルコ国民がこの問いを発したであろう。この問いへの最も正しい答えは、センサスによってのみ明らかになる。同様にセンサスは、進歩の道を手を携え前進し、近代性を向上させるために国民が共通して持つ希望の表現となるだろう。そして、統治する者とされる者が強く結びついている姿を示すだろう<sup>15)</sup>。

この後、センサスがよき意志と規律を持って記録されることの必要性などが説かれ、布告は以下のように締めくくられる。

(……) 文明の豊かさと進歩を高い次元に到達せしめるには、すべての物事について正しいデータを作成し、組織を作り、国民の連帯を強化することが求められる。政府がセンサスの目的とするのも、新たなトルコの豊かさと力を認識することにより、これを文明的、先進的な諸民族のレベルに高めよう

とするためである<sup>16)</sup>。

布告の中では近代、進歩、文明といった言葉が繰り返され、目指す地点がその技術の輸入元である「文明的で先進的な諸民族」、つまり西欧諸国であることが表明されている。優れた自前のセンサスを持つことは、先進国たることの証明のひとつとみなされた<sup>17)</sup>。そして、国を正しい方向に導くための「案内書」センサスの焦点になったのが、国民の「人口密度と質」を正しく知ることであった。

国民の質を読み取るために、共和国センサスに組み込まれていた質問項目は、氏名、性別、年齢、配偶関係、職業といった基本的な情報から、宗教、言語、出生地などに及ぶ(付表参照)。このうち、共和国期に新たに出現したのが、言語と識字に関する項目であった<sup>18)</sup>。調査は、各戸訪問した調査員が世帯主の回答を記録する、いわゆる他計式で行われ、対象となるのはセンサス実施当日にトルコ国境内にいるすべての人々である。センサス当日は外出禁止令が出され、調査は一日で終了する。各年のセンサス実施前には調査員に調査票への記入方法の注意点や質問内容を確認する『調査員への通達』(以下『通達』とする)が配布されており、訪問調査はこの手引書に沿って行われた。

(付表) 一九二七年から一九四五年までのセンサスにおける確認項目

基本情報	氏名		性別	年齢	配偶関係	場所		常住地	国籍	宗教	言語	識字	障害	職業	その他
	一五七	一五八				一五九	一六〇								
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

各年のセンサス調査票を参考に筆者作成。

\*一九二七年についてはアラビア文字表記、一九三五年以降はラテン文字表記について質問。

一九二七年センサス最終結果版として一九二九年に三巻構成の統計集<sup>19)</sup>が出版される。非均質性が目立つ項目の記載が避けられるといった傾向は特に見られず、むしろ非標準的な属性を持つ人々が集中的に分布する県の記載が多く見られる。特に母語項目は、主要な非トルコ語母語話者集団別に作表されており、統計局の関心の高さを窺わせる。分類された集団はいずれも行政地域に基づき単純集計で示され、解説が付記されている。

第一回調査の八年後、一九三五年に再びセンサスが行われる。センサス最終結果版として、六十巻に及ぶ統計集と図表集『地図と表』が刊行されている<sup>20)</sup>。統計集において、一九二七年にとられた形式は大きく変化する。統計集にはデータ集計表のみが記載され、解説は付記されていない。最も大きな変化としてあげられるのが、各項目の行政単位ごとの人口表示の他に、異なる系列の項目が組み合わされたクロス集計表が出現することである。クロス集計の中では、「宗教」が、婚姻、母語、職業、識字と、「母語」が第二言語、職業、識字と組み合わせられ、複数の項目で繰り返し現れている。このことから、センサスにおける人口分類の最も重要な軸となっていたのが、この二つの指標であることがわかる。以下、一九二七年と三五年の調査で、この二つの指標に関するデータがどのようにとられ、いかに示されているかを見ていくことにする。

## 五 伝統的指標「宗教」

宗教項目について、調査票には単に「宗教 (Din)」（一九二七年）、「どの宗教に属しているか (Hangı dindendir?)」（一九三五年）と記されている。しかし、『通達』では記録方法についてより詳細に「この欄には被調査者が属している宗教が書かれる。たとえば、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒のように。ただし、キリスト教徒に関しては宗派も記録すること。たとえば、正教徒、カトリック、プロテスタントのように<sup>21)</sup>。」（一九二七年）「ムスリムについては宗派の違いを記すことなくムスリムと、その他についてはプロテスタント、カトリック、正教徒、ユダヤ教徒……という形で記録する。「クリスチャン」あるいは「アルメニアン (Ermeni)」のように、宗派を明確な形で示さない回答は記入しないこと<sup>22)</sup>。どの宗派に所属しているかを確実に明らかにする必要がある<sup>23)</sup>。」（一九三五年）と指示されている。ムスリムの宗派が不問にされている一方で、キリスト教徒集団内の構成に関する詳細な情報が求められていたことが分かる。

統計集でのデータの示され方を見よう。一九二七年の各県版では、宗教はイスラム教 (Islam) 、カトリック (Katolik) 、

プロテスタント (Protistan) 、ギリシャ正教 (Ortodoks) 、アルメニアン (Ermeni) 、クリスチャン (Christyan) 、ユダヤ教 (Musevi) 、その他、無宗教・不明の九つに分けられているが、全国版において宗教分類はイスラム教、キリスト教、ユダヤ教の三つと無宗教・不明、その他に分けられるのみである。これについては「多くの調査票において、宗教的属性に関して「アルメニアン」、「クリスチャン」という不明瞭な回答が見られたことにより、分類表を作成するためのデータ欠如が起きたため」と説明されている<sup>24)</sup>。調査員や回答者の間の混乱を受けて、統計局が意図した形でのデータ収集に成功しないという状況はその後も続いており、統計局は一九四〇年センサス実施前の『通達』でも、キリスト教徒の宗派を正しく記入するよう強い調子で指示している<sup>25)</sup>。一九三五年統計集の分類は、イスラム教、カトリック、ギリシャ正教、プロテスタント、アルメニア正教 (Gregorien) 、クリスチャン、アルメニアン、ユダヤ教、無宗教、その他、不明の十一項目で示されている。この一方で、『地図と表』版では、「主な宗教の割合」というタイトルの下、ムスリム九八・〇%、キリスト教徒一・四%、ユダヤ教徒〇・五%、その他〇・一%という四つの分類からなる円グラフをもって、トルコが宗教的に非常に均質的な国家であることが視覚的に示されている。

『通達』でみたように、統計局はキリスト教内部の宗派別の人口について強い関心を寄せ、詳細なデータを要求していたにもかかわらず、いずれの版においても、共和国成立後もトルコ領域内にとどまっていた古東方正教会系の宗派名および数値データは記載されていない。統計局の但し書きにある回答データの不十分さという問題を差し引いても、個別の宗派名を分けて示すことは可能であったはずであり、Caglayanの指摘にあるように、詳細データの公表を避けた可能性は否定できない<sup>26)</sup>。

単純化した集団分類には、国民の宗教的な均質性を強調するという側面があったように思われる。一九二四年のカリフ制度以後、民法の改正や修道場・聖者廟の閉鎖等の世俗化政策がとられ、一九二八年には憲法からイスラームが国教であるとの文言も削除された一方で、オスマン期から続く伝統的指標としての宗教が依然としてセンサスの中で重要な位置を占めたのは、ムスリムが圧倒的多数を占めるといふ状況が、国民の一体性を保持する重要な要素であるとの認識があったからであろう。オスマン期の人口調査同様、ムスリム内の宗派が問われていないことはその証左といえる。また、ムスリムであることは、象徴的にはトルコ性と同質のものとして認識されており<sup>27)</sup>、この項目の設定は「トルコ人」の数を明らかにすることと直接つながっていた。逆に言えばこれは、ローザンヌ条約に基づきマジヨ

リティ同様の信教、教育、母語使用などの権利を享受することが保証されていた非ムスリム (gavrimuslim) たちが、センサスの中で「非トルコ人」として読み取られていたということを示している。

## 六 新しい指標「母語」

オスマン期において人口調査項目に設定されなかった母語が、国民を測る重要な指標のひとつとして共和国期に始めてセンサスに導入されたことは、国家内部の言語的均質化へ向けて人々の言語使用の把握、管理に乗り出そうとする体制側の姿勢が明確に反映しているといえる。母語項目について考えるにあたっては、二つの点を確認しておく必要がある。第一に、ある言語を一つの言語と数えるのか、または何らかの言語の一方言と数えるのか、またその言語を何と呼ぶのかというきわめて政治的な問題を、どのように処理していたのかという点である。一九四〇年センサス実施前に行われた調査員向けの説明会の内容を確認すると、宗教同様、母語項目においても不明瞭な回答、記録方法の問題が生じていたことがわかる。統計局は次のように注意を促している。

特定の地域において一部の人々が話すことばが、言語学の中で認知されていないことを理由に、母語として記入されないという状況が起きた。いかなる母語も、言語学の中で認められているか否かは調査では議論の対象にならない。調査では主観的な回答によって情報を集める努力がなされている。回答者が嘘を言っていない限り、いかなる回答であっても、自らの疑いをはさむことなくそのまま記入すること。回答については統計局が科学的見地から評価する<sup>28)</sup>。

この記述から、統計局は不明瞭な回答を自らの裁量で振り分けまともていたにせよ、基本的には回答者の主観的な言語認識を重視していたとみなせる。

第二の点は母語の定義にまつわる問題である。一般に、センサスの中で言語について問う際には、三つの基本的な形式がある。①初めて習得し使用している言語である「母語」、②個人的、あるいは家庭内で恒常的に使用する言語、③知っているすべての言語を聞くという三パターンである。①の「母語」使用のデータは、教育や支配言語への適応に影響された結果の言語的習慣を示すものではなく、回答者のオリジナルな言語を示すため、同化過程にあるマイノリティの数を裏付けることができる。逆に、②の恒常的に使用する言語という質問は、支配言語

の使用状況を裏付けるものになる<sup>29)</sup>。質問票には、「母語(家族内で話されることば) (Ana lisan (Aile arasında konuşulan lisan))」(一九二七年)、「母語は何か(母語の意味は家庭内で話されていることばである?) (Ana lisan nedir? (Ana lisanından maksat aile içinde konuşulan lisanıdır?))」(一九三五年)と記載されている。つまり、共和国センサスでは、「母語」を家庭内言語と定義したうえで、私的領域における支配言語の使用状況が測られていたといえる。

統計集での母語データの示され方を見てみると、一九二七年の母語分類は、「母語による人口分割」というタイトルのもとで、トルコ語と並び、その他の主要な言語としてクルド語、アラビア語、ギリシャ語、チェルケス語、ラディーノ、アルメニア語の六言語があげられている。さらに「非トルコ語母語話者人口の言語ごとの分割」というタイトルのもとで、母語は十三言語と、その他に分けられている<sup>30)</sup>。いずれの表も、主要な言語のみが取り上げられていることが分かる。だが、一九三五年の分類では三十一もの言語が取り上げられ、非常に話者数の少ない言語に至るまで数値データが示されるという変化が見られる。表の言語配列は、トルコ語を先頭とし、その他の言語はアルファベット順に示される。小規模の集団が「その他」にまとめられた「宗教」分類とは対照的である<sup>31)</sup>。

ともすれば国家内部の言語的な非均質性が表出してしまいう項目で、これだけ詳細にデータを表示した理由はどこにあるのだろうか。石川真一は、国家に属する全住民を「トルコ人」とすることを前提に国民形成を行ってきたトルコのセンサスにおいて、母語が問われその内容が示されていることについて、「国勢調査を見る限り、内部に言語的多様性があることは認知しているわけであり、逆に言えば、そのことは前提としてなお全住民が、「同胞としてトルコ人」であるとす憲法の理念が裏打ちされているとみなすことができるであろう。」と述べている<sup>(28)</sup>。確かに、一九二七年『通達』に見られる「母語が意味するのは、ある人が家庭の中で子供たちと話す言語である。たとえば、一部のユダヤ人 (Museviler) やボスニア人 (Bosnaklar)、その他の人々は、トルコ人 (Türk) でありトルコ語を知っているにもかかわらず、家族の間でラディーノ (Musevice) 、ボスニア語を話している<sup>(29)</sup>。」という箇所はこの主張を裏付ける。すべての国民を「トルコ人」とする憲法の理念に依って立つことによつて、センサスの中で解消すべき、あるいは矯正されるべき様々な状況を明示できたのだといえよう。

とはいえ、統計局は宗教ほど高い均質性を示さない言語項目の扱いに関しては慎重である(一九三五年、トルコ語母語話者は八六%にとどまっていた)。一九三五年の統計表で表示する

言語を話者の多寡にかかわらず同列に扱ったこと、また、宗教項目については数ページが割かれている『地図と表』において、言語項目に関するグラフが一切収録されず、データの視覚化が避けられていることは、非トルコ語母語話者集団の大部分を占めるクルド語母語話者集団の規模の大きさが際立つことを嫌ったことが要因のひとつと考えられる。一九二〇年代半ばから東部地域でクルド系の反乱が頻発するという状況の中で、体制を揺るがしかねない大規模非トルコ語母語話者集団の存在は脅威であった。

母語項目の調査に関しては、『通達』以外の場所で、重要な言及がなされている。それは一九三五年センサス実施前に、アンカララジオで放送された調査員の心得を説く講演会の記録の中で現れる。

(第一回年センサス調査員の) 多くが、以下のような疑問をもち、その答えを自分たちで出せなかった。「ユダヤ人とトルコ人の名前を別々に記録する必要はないのだろうか。」彼らは大きな間違いを犯していた。調査票には名前も記入する。だがこれには何の価値もない。作業において重要なのは、母語の欄に誤りがないことである。それが民族を示す (Milliyetleri göstermektedir.)<sup>(30)</sup>

これは、国家の視線の中で母語が民族に読み替えられていることを明確に示している。そして、その姿勢がよりはっきりとするのが、一九三五年センサスより導入される「第二言語」という項目である。

## 七 「第二言語」項目の導入

第二言語項目が導入された一九三五年の調査票には母語に加えて「母語の他にどの言語が話せるか (Ana lisanndan başka hangı lisan konuşmasını bili?)」と記載されている。統計集においてその結果は、母語とのクロス集計表で示されている。

質問の意図としてまず考えられるのは、各非トルコ語母語話者集団のトルコへの言語的同化傾向の把握である。第二言語と母語のクロス表から、非トルコ語母語集団を個別に取り出すと、集団によってトルコ語使用率が異なるのがわかる。母語話者集団ごとの第二言語としてのトルコ語の使用率割合の把握により、各言語集団に対する教育、言語政策や同化政策について、異なるアプローチが可能になる。例えば、ギリシャ語を母語であると回答した集団のうち、ギリシャ語モノリンガルは約二四%で、約六〇%は第二言語としてトルコ語を、一五%は複数言語名を

あげている。これに対しクルド語を母語と回答した集団では、約七四%がクルド語モノリンガルであり、第二言語としてのトルコ語使用者は約二六%にとどまる。しかし、この目的のためだけなら、非トルコ語母語話者にトルコ語使用の可否を聞けば事足りたはずで、煩雑に言語名を聞く必要はない。

第二言語導入の意図はむしろ、母語と組み合わせることでのより詳細なエスニックな属性の絞り込みにあったと言えるのではないか。トルコ語を母語として回答した集団のうち、トルコ語モノリンガルは九六・七二%にのぼるが、第二言語としてトルコ語以外に知っている言語があると回答した人々の実質数(約四五万六千人)は、彼らが集住している可能性を考えれば決して少なくない。このうち、第二言語として英語やフランス語など西欧圏の言語名を回答した人々とは別に、旧オスマン領地域を含む土着の言語を挙げた層の多くは、「第二言語」がエスニックな属性を仄めかす<sup>55)</sup>。たとえば、第二言語としてギリシャ語を使うと回答した約六万六千人は、住民交換によってギリシャ領から流入したムスリムと、言語的にトルコ化したギリシャ正教徒の双方で構成されていると考えるのが自然だろうし、クルド語を第二言語と回答した約九万七千人のうち殆どは、言語的にトルコ化したクルド人と言ってよいであろう。第二言語項目が、一九三四年に制定された入植法(法二五一〇号)と軌

を一にして出現していることは示唆的である。入植法は東部のクルド人居住地域を中心に、カフカスやバルカンからの移民を定住させトルコ化を図るものであったが、このためにはトルコ化を推進すべき地域住民の正確な把握が要請されたはずであり、そこで使用される言語の調査は決定的に重要であったからである。

## 八 おわりに

共和国期センサス導入期においては、伝統的な「宗教」と並んで暗に民族の代用として機能した「母語」という二つの指標が「国民」を測る重要な指標として設定された。この二つの指標は、回答者や調査員の誤解や逡巡から生じたゆがみを含みながらも、一九三五年調査結果のクロス集計で結節する。このクロス集計は、無数の組み合わせを可能にする集団分類の、基本的な出発点となった。この結節点を中心に、「国民」は様々な

項目を掛け合わせることで理解されたのである。ここには、オスマン期において宗教、あるいは宗教に付加的な要素が曖昧に混ざりあった指標によって分類されていた人々が、明確に系列化された複数の指標から理解されるようになったという集団分類の大きな転換がある。

センサスの基本的な性質が領域内人口の質的理解にある以上、人々は何らかの指標で分類されることになる。オスマン期から続く伝統的な社会構造をひきずりながら、「国民国家」として均質化に邁進していたトルコにおいて、描かれる国民像は錯綜していた。そうした状況で、国民の複合的な属性把握は現実的な選択であり、集団をラベル付けせずに示せるクロス集計はまことに都合の良い方法であったといえる。この方法により共和国期センサスは、マジヨリティを最大範囲に広げた設定から、国家にとって最も望ましいと認識される集団、あるいは矯正されるべき集団のみを取り上げる設定まで、数値で読み取ることが可能になるように編成されたのである。

- (1) 安元稔(編) 二〇〇七年『近代統計制度の国際比較』日本経済論評社、九三頁。
- (2) Starr, Paul (1983) *The Politics of Numbers*. New York: Russell Sage Foundation, p11. のほか、調査の均質性(同一調査票の使用、確定された調査領域)・継続性(少なくとも一〇年に一度の実施)が挙げられる。安元、前掲書、IX頁。
- (3) Kertzer, David & Arrel, Dominique (2002) "Censuses, Identity Formation and the Struggle for Political Power" in Kertzer & Arrel (eds) *Census and Identity: The Politics of Race, Ethnicity and Language in National Census*. Cambridge: Cambridge University Press, p.7. アンタールン・ムネデヤクト 二〇〇五年『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』糟谷啓介他訳、作品社、五六頁。
- (4) フーコー、ミシェル 二〇〇六年『フーコーロクティョンの生政治・統治』小林康夫他編、筑摩書房、二六六—二七一頁。
- (5) トービー・ジョン 二〇〇八年『バスホートの発明・監視・シテイスンシット、国家』藤川隆男監訳、法政大学出版局、二一九頁。
- (6) Scott, James C (1998) *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*. New Heaven/London, Yale University Press, p 65.
- (7) マンタールン・ムネデヤクト 二〇〇七年『定本 想像の共同体』白石隆・白石ゆき訳、書籍工房早山、二七七一—二八二頁
- (8) Kertzer, op. cit., p.10. Arrel, Dominique (2002) "Language Categories in Censuses: Backward or Forward Looking?" in Kertzer & Arrel (eds) op. cit., pp 94-95
- (9) Arrel, op. cit., p.96.
- (10) の調査書、Kartal & 研究 (Kartal Enver Ziya (1943) *Osmanlı İmparatorluğunda İle Nüfus Sayımı*, Ankara, DİE Yayınları) に於てオスマン期における初めての人口センサスと位置づけられて以来、様々な研究の中で慣例的に「センサス」と呼ばれてきた。しかし、McCarthy が一八三一年以後のオスマン期の人口記録が「センサス」と呼ばれることは決して異議を唱えておらず、オスマン期に於て「国土のすべての住民を一定の時間内に測る「センサス」は存在せず、行われなかったのはあくまで人口登録システムであると指摘したうえで、初のセンサスが行われたのは共和国建國後であると述べている。(McCarthy (1983) *Muslim and Minorities: The Population of Ottoman Anatolia and the End of the Empire*. New York/London, New York University Press, p.164)
- (11) Karpat, H. Kemal (1985) *Ottoman Population 1830-1914 Demographic and Social Characteristics*. The University of Wisconsin Press, pp.19-21. Shaw, Stanford, J (1978) "The Ottoman Census System and Population 1831-1914" in *Journal of Middle Eastern Studies* No. 9, pp.325-326.
- (12) Sakin, Orhan (2008) *Osmanlı'da Ethnik Yapı ve 1914 Nüfusu*. İstanbul, Ekim Yayınları, pp.149-151. Dündar, Fuat (2008) *Modern Türkiye'nin Siyasi Geceği*. İstanbul, İletişim, p.90. Karpat, op. cit., pp.148-149.
- (13) Dündar, ibid., p.90 Karpat, op. cit., pp.162.



トルコ語の三つのレベルが存在する」と論じている。Çagaptay, op. cit., pp 253-254.

- (28) Aybar, op. cit., p 41.
- (29) Lieberman, Stanley (1966) "Language Question in Censuses" in Dil, Anwar S. (ed) (1981) *Language Diversity and Language Contact*, California, Stanford University Press, p 287.
- (30) Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü (1929) *Umumi Nüfus Tahrihi 28 Teşvikiyel 1927 vol. 3*, p 31.
- (31) Başbakanlık İstatistik Genel Direktörlüğü (1937) *Genel Nüfus Sayımı, 20 İlhesrin 1935: Türkiye Nüfusu Kar' Tasnuf Neticeleri* vol. 60, pp 133-170.
- (32) 石川真作 二〇〇四年「第六章 トルコ——同胞とトルコ——」

青柳真智子編『国勢調査の文化人類学 人種・民族分類の比較研究』古今書院、九五—九六頁。

- (33) "Tahrir Memurlarına Mahsus Mufassal Taimatname" in Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü (1929) op. cit., p 113
- (34) Berkin, Servet "Genel Sayım Hakkında Konuşma" in Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü (1941) op. cit., p 60.
- (35) 例外的に注意が必要なのはスズイン語である。宗教と母語項目のクロス表から見ると、スズイン語はラヴィーノと並んでほとんどがユダヤ教徒によって使用されている言語であり、実質的にはラヴィーノを指している可能性が高い。この状況は第二言語に関する質問にも当てはまると考えるのが自然だろう。  
(あきやま ゆうじ) 博士後期課程)